論文要旨

学位論文題目　山雲子の仮名草子について―西鶴へ至る「情」の文学として―

氏名　陳羿秀　専攻　比較社会文化学

山雲子は本名坂内直頼、元武士でその後浪人となり、京都に移り住んだ。延宝二年（一六七四）刊『（頭書／新抄）伊勢物語』をはじめとして、正徳元年（一七一一）刊『山州名跡志』など、様々な注釈書・啓蒙書や地誌を世に送り、これまで、彼の著述の傾向から、和学者と目されてきた。本論は、匿名作とされてきた通俗性の強い草子本をすべて山雲子の作品であると示し、彼の仮名草子作家としての一面を浮き彫りにした。全体は二編構成とし、第一編は、四章構成とし、山雲子の著作活動に注目し、彼の匿名作、及びその周辺にいた西鶴を初めとする作家達との交流を、山雲子の当時の仮名草子作家としての位置づけを掘り下げた。第二編は、三章から成り、山雲子の「情」の文学の特徴を考察する。山雲子の匿名作に当時の男女の色事について描かれるものが多く、そこに彼独自の「情」論が展開される。第一編で明らかになった山雲子の匿名作や実名入り作に窺える「情」に目を向け、その「情」の特徴と同時代に活躍した西鶴のと見比べ、山雲子の西鶴に及ぼした影響を考察した。これらを順番に説明すると、以下の通りである。

第一編の第一章では、まず近世前期の仮名草子作家のあり方につい

て仮名草子作家の先行研究を通して述べた。彼らは、山雲子との共通点として、浪人出身者であること、その仮名草子の著述に実名の署名がなされていないことが挙げられる。それは通俗性の高い仮名草子なら、当時では「余技」とされることからであろう。加えて、その匿名の著述から作者にたどり着く方法として、署名の特徴・作品の内容・などが取り上げられるが、その代表例として、浅井了意と西村市郎右衛門の署名特徴を考察した。

第二章では、山雲子作とされる貞享三年（一六八六）刊『好色訓蒙図彙』などの著作から得られた作者の署名の特徴・『徒然草』引用の共通性などを手がかりに、風俗本が盛んに出されたと思われる延宝から貞享年間までの匿名の風俗本に考察を加えた。その結果、延宝九年（一六八一）刊『名女情比』を初めとする著作はすべて山雲子の手によることがわかった。

第三章では、第二章で明らかになった山雲子の匿名作をもとに、山雲子の著作の先駆性について言及した。山雲子は浅井了意と同じく浪人出身であることと、数多く啓蒙書や仮名草子などを出している点において共通点は多いが、著作の『都風俗鑑』の風俗の描写が西鶴の『好色一代男』に影響を与えたりしたことから、西鶴の浮世草子に先取りする面も窺える。

第四章では、山雲子の著作の傾向と、同時代に活躍した西鶴・本屋作家の西村市郎右衛門と山の八との関わりを考察した。従来の説では、京都の書肆である西村市郎右衛門は大坂の西鶴と対抗するために、貞

享三、四年の間に浮世草子を出し続けたと指摘されている。ところが、本論の調査により、それは西鶴対西村市郎右衛門という、一対一の図式ではない可能性を改めて確認できた。山雲子もこの時期に『好色訓蒙図彙』などの風俗本を数多く出していたことを考慮すると、むしろこれは山雲子も含む京都の文化人達対西鶴の対抗ではないかと推測した。加えて、山雲子と近い関係にあるとされる山の八も同じ出版傾向が見らることから、山雲子は当時の浮世草子の出版動向と深く関与していることが窺える。

第二編の第一章では、第一編に明らかになった山雲子の著作『名女情比』の「情」論の特徴を明らかにした。まず、『名女情比』に頻繁に使われた『伊勢物語』の話や巻一―二「小野小町が事付情の評判」に見られる「小町説話」と巻一―三「小町があね哥の事」などのように歌の解釈を中心にした話に考察を加えた。その結果、山雲子は今まで注釈書や謡曲などにおいて情深い女性として評価されてこなかった『伊勢物語』十二段の「武蔵の女」や小野小町の情をあえて評価することにより、彼が良しとする「やさしき心」と「実のある恋」などの「情」の姿勢を打ち出していることがわかった。

第二章では、恋歌や「情」論が見受けられる『和歌詞林抄』、『名女情比』と第一編で山雲子の著作と判明した『好色袖鑑』に見る「情」の共通性を考察した。その結果、三作の「情」論は『徒然草』第三段と一三七段を踏まえることにより、その「情」論を展開していることがわかった。なお、『徒然草』を利用する際、近世前期の『徒然草』

の注釈書である『野槌』や『文段抄』などを根拠にしていることも明らかになった。

第三章では、まず山雲子作と西鶴作に共通している『徒然草』第九段「かのまどひのひとつやめがたき」との関わりを明らかにした。続いて、近世前期の「情」論の形成と展開について考察を加えた。その結果、『心友記』を初めとする「男色物」が山雲子の著作に見る一途な「情」を求める姿勢と深く関わったことは判明した。加えて、山雲子の「情」の精神性への追求が同時代の西鶴の『好色一代男』などに大きく影響を及ぼし、山雲子と西鶴の関係の深さが改めて確認できた。

以上の考察により、山雲子は西鶴の浮世草子に先駆する仮名草子作家であることがわかった。今後、山雲子に限らず、仮名草子作者が生んだ「情」論が、恋愛観、女性観、歴史人物評価に与えた影響を今後も追及していきたい。